

## 織田作之助における市井の人々の描き方について

－『木の都』における家族愛を題材に考える－

### On Ordinary People, Osaka and Novels in Sakunosuke Oda's View

－ A Study of The Theme of Family Love in the “Ki no Miyako”－

古田 雅雄

Masao Furuta

#### 目次

はじめに：織田作品にある共通要素を認識すること

1. 『木の都』のあらすじと論評：なお疑問が残ること
2. 三つの疑問とそれへの3つの仮説：本作品を読む際に念頭におくべきこと
3. 仮説1についての解釈：母親の不在について注目すること
4. 家族の構造と機能の理論：家族社会学から家族を分析すること
5. 仮説2についての解釈：本作品は私小説ではないこと
6. 仮説3についての解釈：「小説の思想」と「小説の中の思想」とを区別すること

むすび：織田作之助は大阪の「小説の思想」家であること

参考文献

#### はじめに：織田作品にある共通要素を認識すること

「大阪は木のない都だといわれているが、しかし私の幼時の記憶は不思議に木と結びついている」で始まる『木の都』は、織田作之助（1912-47）の珠玉の小作品のひとつである。

中石孝の解説によれば、『木の都』は雑誌『新潮』1944年3月号に発表された。戦争の敗色は濃くなるが、まだ大空襲にも遭わず、大阪にも緑の地帯はかなりあった。『木の都』は、戦争直後、死の直前の、大向うをねらうポーズをとった流行作家・織田作之助の無頼派のイメージとは程遠い作品である。織田作之助の本質には古風な抒情詩人の一面がある、と中石は指摘する〔中石、1998年：14頁〕。

本作品は、作者の市井に生きる、無名の人々への愛情にあふれた、派手さのないしっとりとした、まさに静かにゆったりした雰囲気醸し出す。戦時下にかかわらず、本作品中、「時局」とおぼしき場面や表現は間接的にしか想起させない。この小説のモチーフは、日常生活ではあまり気にも留めないような、平凡とも言えるが、大切な家族内の「愛情」である。

2012年は織田作之助生誕百周年であった。彼に関わる著書が次々と刊行された。織田の出世作『夫婦善哉』『世相』、絶筆となった『土曜夫人』などが有名である。織田の各作品のモチーフは、市井の人々の生きざまを描くこ

とにあり、それを彼流の優しい眼で見つめる。それが持ち味である。『木の都』には、他の作品にあるような派手な表現や男女の愛憎などのような激しい場面は一切現われない。それどころか、社会の底辺に息づく人々の懸命に生きようとする、ある家族の日々を描いている。そこには突飛で劇的な光景は現れない。しかし、だれでもが「ふと」したことで日常気にも留めない仕草、態度や行動をのちほど振り返ると、ある種の感動を覚えることがある。そういった人々との出会いと別れに人生の機微をおいた家族の愛情や絆を描いている。「平凡であることがもっとも美しく、感動的であるしかけがないもの」ということを読後に感じる作品である。

筆者は本作品を読むごとに三つの疑問を感じる。それらの疑問をそれぞれへの解答を探るために仮説を設けて考える。本論は『木の都』を題材にして、それらの疑問を解明することで、織田文学の核心を理解することを目的とする。

### 1. 『木の都』のあらすじと論評：なお疑問が残ること

1944年1月短編『天野名曲堂』を『新潮』用に送ったが、締め切りに間に合わずに『木の都』と改めて書き直す[増田、1992年：61-62頁]。初出は同年『新潮』3月号に掲載された。戦後、単行本『猿飛佐助』[三島書房、1946年]に収録された。

本作品は、戦時下、「私」が故郷の大阪市天王寺区の区役所に所用で10年ぶりに訪れたところから展開する。昔のままの町並みの様子が変わらないことを懐かしく感じつつ、口縄坂を上がると、昔なじみの書店はなく、レコード店「矢野名曲堂」の看板がかかっている。「私」は何枚かのレコードを購入し、その店を出ようとすると雨が降りだした。店の主人に傘を借り、その傘にある名からその主人は偶然にも、「私」が京都の学生時代に通っていた洋食屋の店主であったことを思い出す。「私」は借りた傘を返しに、再び名曲堂を訪ねる。主人であり家庭人としての父には、北浜で働く娘、小学生の息子・新坊の二人の子供がいた。新坊は無口だから受験する中学校の口頭試問を心配されており、中学受験に失敗する。父は新坊に働くことを身につけさせようと新聞配達をさせ、「私」を驚かせた。その後、新坊は名古屋に徴用され寄宿舎生活を余儀なくする。新坊は父や姉が恋しくて徴用先の工場から無断で帰ってくる。しかし、父は新坊を泊めようともせず、いっしょに名古屋に送っていく。それでも新坊は家に帰りがるので、父は思案のあげく、店を畳んで娘とともに名古屋に引っ越す決意をする。「私」が年末に訪れると「時局に鑑み廃業」の張り紙があった。

「口縄坂は寒々と木が枯れて、白い風が走っていた。私は石段を降りて行きながら、もうこの坂を登り降りすることも当分あるまいと思った。青春の回想の甘さは終り、新しい現実が私に向き直って来たように思われた。風は木の梢にはげしく突っ掛っていた」という文章でこの物語を閉じる。

本作品への三つの論評を紹介しておこう。

青山光二は次のように論評する。同時期の作「聴雨」と同じく、純粹に構成手法としての「私」小説の形式をとる。すなわち、作中の「私」は作者と等身大の人物であるが、作者自身ではなく、「私」について述べられた事柄をそのまま作者自身にあてはまるものとして信をおきがたいという点が、おおかたの私小説とは異なっている。しかし、「私」は古き大阪への郷愁が色濃くたぐい、上町一帯の情景を風物誌ふうによく叙する著者の筆には哀惜がこめられている。大阪の庶民気質や人情への深い共感が読みとれる一遍であり、作家としてようやく年輪を加えてきた著者の風貌が感じられる[青山、1970年：373頁]。

青野季吉は次のように論評する。「大阪の市井という魂の故郷を再発見しようとした」と云っているが、そうい

う心願が — ひとたび故郷を離れ、インテリとしての意識の洗礼を受けたものには、到底満たされないはずの切ない心願、そうした形でこの作品のそこに跡をとどめる。その切ない心願が直接にはっきり出ているのは、『木の都』である。この作品はそれを別にしても、大阪の市（まち）なかの移り変わりと、おそらく作者の自伝の一節であろうが、早くそこを離れ、ふたたびそこを訪れて感慨を寄せる主人公との、スイートな物語である。詩情をたたえた、美しい物語である。『夫婦善哉』からこの作品へ来ると、何かアクがとれて、素直な作者が、素直なポーズで出てきた感じで、わたしはこの作家の人間としてのゆかしい一面に触れたような気がした。この作品に出ている少年新坊は、東京のような都会の同型の少年で、この作者の好んで描く人物群の一種であると云える。

この作家は、切ない愛情というものをいろいろな形と、境地で描き、ないしは「歌って」いる。その意味で、織田文学は、現代社会がもっとも虐めつけている人間の自然の愛情のために、それとなく抗議している愛情文学ともいえるであろう。新坊にたいする父と姉との愛情、また新坊の父姉にたいする満たされぬ愛情が読後に、木犀の香りが、華がりに閃めくように、読者の胸をひたす作品である [青野、1950年：218頁]。

宮川康は次のように論評する。愛染祭や生国魂祭にも触れながら、「木の都」としての大阪の下町をしっとりとした情緒のなかに描きだした。この作品は、青野季吉が評したように「詩情をたたえた、美しい物語」として読まれ、『夫婦善哉』や『わが町』と並んで織田作之助の戦時下の代表作とされてきた。しかし、青野の評が戦後の初刊の本文に基づくものであることは明記されねばならない。むしろ、「懐旧の情よりは、知人一家の生活の交信」を中心に描かれる。

新坊が「新聞配達をするよりも工場で働く方がお国の役に立つと思ひ、進んでそうさせた、大阪にも工場はあるが、しかし可愛い子には旅をさせた方がよいと、わざわざ名古屋へやったのだと、主人らしい意見であった」と。新坊は「徴用」ではなく、家族の意志で進んで名古屋へ働きに行ったのである。その後父と姉の転職事情は同じである。これは、1943年末から1944年初めにかけての時局が反映する。この作品もまた、単に抒情的、回顧的にだけで大阪を描くものではない [宮川、1999年：189-190頁]。

## 2. 三つの疑問とそれへの3つの仮説：本作品を読む際に念頭におくべきこと

第一の疑問は登場人物の設定である。この作品の登場人物は、「私」という作者（たぶん、織田作之助）、矢野家の53歳の元船乗り、元料理人、現在レコード店「名曲堂」店主の父親、25歳の北浜に勤める姉、弟で小学校を卒業すると新聞配達、のちに名古屋の工場に徴用される新坊である。なぜか矢野の妻（姉弟には母）は登場しないし、その話題は描かれることはない。たぶん、この物語の時期にはすでに亡くなっていたのであろうか。そこで、なぜ矢野の妻、新坊の母親は登場しないのだろうか、という素朴な疑問である。だが、本作品には、そのことの説明はない。

織田は、父、母、子供がいるといったありふれた家族の世帯を描くのを避けたかったらうか。母親の存在をこの作品では不要と考えたのだろうか。前年に執筆した『清楚』には良き家族が描かれている。織田は、本心かどうかわからないが、円満そうな家族を描くのは嫌だと述べた [大谷、1973年：183頁]、という。その本心を確認できない。それに姉は父子関係に割り込むほどの描写はない。そうすると、姉はこの家族内の関係には重要ではないのだろうか<sup>(1)</sup>。どのような役割をはたしているのだろうか。

第二の疑問は、そういった家族を大阪の下町に住ませ、「私」の青春と二重写しの形をとった背景を作品に設けたことである。なぜ織田が慣れ久しんだ故郷を舞台に選び、父子の愛情を描こうとしたのか。それは終生大阪に、そこに息づく人たちの生活にこだわったからだろうか。この作品でも舞台は大阪の下町である。織田のお得意の場

面設定である。そして、本作品は本当に「私小説」といえるのだろうか。

第三の疑問は織田の小説観に関わる点である。親子の情、これは本作品のモチーフである家族の愛情である。それと、戦後、織田が主張した「小説の思想」とどのように関係し、本作品に反映されているのであろうか。

では、さきの論評は筆者の疑問に答えてくれるであろうか [増田、1992年：62頁]。

青山の論評では、第一と第二の疑問について、ある程度、解説しているが、筆者にはまだ物足さを感じる。確かに完全な「私小説」でないとする指摘は正鵠を射るようだが、なぜ、そのような設定をするかの意図までは説明していない。第三の疑問については、織田文学の核心部分なので、大阪人気質を小説全体の中から「小説の思想」を論じなければならない。

青野の論評に関して、筆者の疑問に総体的に答えているが、ではなぜ母（=妻）が登場しないのかの事情の推測とそのことで作品に表わそうとする効果についてはふれていない。また、織田が言わんとする思想をもっと採り上げてくれないか、という感想を抱いてしまう。

宮川の説明は、作品の解説として様々な観点から、作品の事情を理解させる。父子の愛情を理解できるとしても、その論評から「母（=妻）の不在」が小説上の展開において、その意味を論じていない。また、大阪にこだわり続ける織田の心境（さらに「小説の思想」）をどのように評価するのは不明である。

では、筆者の疑問からそれへの仮説を考えておこう。

第一の疑問に対する仮説1は、小説を効果的に盛り上げる技法のため、母（=妻）の不在で弟（新坊）への愛情を父・娘に担わせて、父と息子、娘と弟が醸し出す家族愛をいっそう浮き彫りにしたかったからである。母（=妻）という不在がかえって家族の結びつきの強さを浮き彫りにする効果を狙う。本作品のテーマを明確にするために、小説の構成上の一種の技法である。それは人々に共感できるための工夫でもある [『東京文壇に与う』]。織田自身の少年時代と重なるが、彼が終生大阪（のそれも下町）に生きる人々にこだわり続けた理由でもある [『電信棒の電燈』]。そのことは織田自身の人生において「母親像」が重なる。織田は新坊の姉を小説の中では母親代わりとして扱わないが、小説の中で姉を不可欠な存在とする。なぜなら、姉が完全に母親代わりになりきれないとはいえ、かえってこの家族内の、父を中心とした結束のあり方を表現するからである。

第二の疑問に対する仮説2は、どうしても大阪の下町を舞台にしたいのかである。織田は東京中心でなく、地方の文化を強調する。つまり、地方からの文学的発想をその地方だけに留めるのではなく、文学として、他の人々にも共有化、普遍化することを主張する。言い換えれば、人間の本質を描くことに終始した。だから、織田は自ら熟知する場所だからであり、それは大阪の下町だから出せる情緒、人情、勤労観、古き共同体への郷愁を表現できる。

第三の疑問に対する仮説3は、織田の主張する「小説の思想」を証明することである。彼の言う「小説の思想」は『木の都』でも反映される。この点に関してはのちに説明するが、仮説1・2と関連する。織田が小説を執筆する際の姿勢である。理念と言い換えてもよい。それは小説の中に散りばめられた個々の思想ではなく、小説全体そのものから読者に訴えたい「小説の（もつ）思想」である。織田の主張する「小説の思想」が本作品でも底流をなす。

### 3. 仮説1についての解釈：母親の不在について注目すること

まず、父親の人物像である。主人（=父）は若い頃から欧州航路の船員だったが、40歳のときに下船し京都の吉田で洋食屋をはじめた苦労人である。美味しくて安い食事を学生に提供しすぎて、結局、店を閉じた。学生に聴かせる莫大な数のレコードが残り、大阪の下町とは不釣り合いの「名曲堂」をはじめた動機になる。

家族構成では、娘は父28歳ごろ生まれたと推測できるから、その時、父はまだ船員の頃である。新坊は下船した

ころに生まれた。母(=妻)は、「私」と主人との再会する10年前ほどに亡くなったことになる。父の子への愛情と自慢、ここには母のもつ愛情が含まれる。もっとも、青野が指摘するとおり、新坊は父と姉に対する満たされない愛情を抱く。通常、その愛情表現は母親が「子へのやさしさ」という役割を担うはずだが、ただ作品では、父には、父と母が共存した形で、新坊への愛情と厳しさを感じる場面がある。

只今とランドセルを背負った少年がはいって来て、新坊、挨拶せんかと主人が言った時には、もうこそそと奥へ姿を消してしまっていた。どうも無口な奴でと、しかし主人はうれしそうに言い、こんど中学校を受けるのだが、父親に似ず無口だから口頭試問が心配だと、急に声が低くなった。たしかお子さんは二人だったがと言うと、ああ、姉のほうですか、あの頃はあなたまだ新坊ぐらいでしたが、もうとっくに女学校を出て、今北浜の会社へ勤めていますと、主人の声は又大きくなった【『木の都』】。

帰り途、ひっそりと黄昏れている口縄坂の石段を降りて来ると、下から登って来た少年がピョンと頭を下げ、そのままピョンピョンと行ってしまった。新聞をかかえ、新坊であった。その後私は、新坊が新聞を配り終えた疲れた足取りで名曲堂へ帰ってくるのを、何度か目撃したが、新坊はいつみても黙って硝子扉を押してはいって来ると、そのまま父親にも口を利かずにこそそと奥へ姿を消してしまうのだった【『木の都』】。

新坊が帰ってくると私はいつもレコードを止めて貰って、主人が奥の新坊に風呂へ行ってこいとか、菓子の配給があったから食べるとか声をかける隙をつくるようにした。奥ではうんと一言返事があるだけだったが、父子の愛情が通う温さに私はあまくしびれて、それは音楽以上だった【『木の都』】。

ところが名曲堂に入ってみると、主人は居らず、娘さんがひとり店番をしていて、父は昨夜から名古屋へ行っている、ちょうど日曜で会社が休みなのを幸い、こうして留守番をしているのだという。聴けば、新坊が昨夜工場に無断で帰って来たのだ。一昨夜寄宿舎で雨の音を聴いていると、ふと家が恋しくなって、父や姉の傍で寝たいなと思うと、今までになかったことなのに、もうたまらなくなり、ふらふらと昼の汽車に乗ってしまったのやという言い分けを、しかし父親は承知せず、その晩泊めようとせず、夜行に乗せて名古屋まで送って行ったということだった【『木の都』】。

しかし愛情はむしろ50すぎた父親の方が強かったのではあるまいか。主人は送っていく汽車の中で食べさせるのだと、昔とった包丁によりをかけて自分で弁当を作ったという。この父親の愛情は私の胸を温めた【『木の都』】。

わたしは子供の時から40の歳まで船に乗っていたが、どこの海のうえでもそんな女々しい考えを起こしたことは一度もなかった。馬鹿者めと、主人は私に食って掛かるように言い、この主人の鞭のはげしさは意外であった。帰りの途は暗く、寺の前を通るとき、ふと木犀の香が暗がりに閃いた【『木の都』】<sup>(2)</sup>。

冬が来た。新坊がまたふらふらと帰って来て、叱られて帰って行ったという話を聴いて、再び胸を痛めたとき、私は名曲堂から遠ざかっていた【『木の都』】。



「私」だけでなく、この父子の事情を知れば、知るほど、新坊に「ガンバリや」と声をかけたるなるほどいとおしくなる。新坊の身の回りの世話は母親の「役割（＝母が子に注ぐ愛情）」である。新坊は母親が恋しい年頃のはずである。その記述はない。ところが、作品中この父子の愛情の深さを示す箇所は、最後の標札屋と「私」の会話のなかで現われている。

「時局に鑑み廃業仕候」と貼紙がある。…名古屋に行ったという。名古屋といえば新坊の……と重ねてきくと、さいなと老人はうなづき、新坊が家を恋しがって、いくら言いきかせても帰りたがるので、主人は散々思案したあげく、いっそ一家をあげて新坊のいる名古屋へ行き、寝起きを共にしていっしょに働けば新坊ももう家を恋しがることもないわけだ、それよりほかに新坊の帰りたがる気持ちをとめる方法はないし、まごまごしていると、自分にも徴用が来るかも知れないと考え、20日ほど前に店を畳んで娘さんと一緒に発ってしまった。娘さんも会社をやめて新坊といっしょに働くらしい、なんといっても子や弟いうもんは可愛いもんやさかいなと [『木の都』]。

#### 4. 家族の構造と機能の理論：家族社会学から家族を分析すること

ここで家族とは何かを考えたい。なぜなら、家族社会学の知見から第一の疑問と仮説1を説明できるからである。

家族は子供の養育やそのための欲求を準備する親族集団 (kinship group) である。原始的な社会では、家族が唯一の社会制度である。そのため、子供は家族の活動を通じて知る必要のあるすべてを学習できる。家族の形態と機能において様々な形態が存在するとはいえ、いくつかの規範と価値観はあらゆる社会に共通する。

そのひとつは、それぞれの子供の存在は社会的に承認された両親が認知する「正当性の原則 (principle of legitimacy)」である。これは親が社会的にそれぞれの子供に責任あることを意味する。

現代社会では、核家族は重要な家族単位となっている。親族家族は機会ごとの儀式のために参集するかもしれない。しかし、あらゆる重要な義務や責任は核家族に割り当てられる。子供の世話は、とりわけ母、妻、姉などの女性がその義務と感情を所持するのが通常であろう。男性の家族に対する責任の感情的な結びつきは、彼がこれまで成長した軌跡に由来する [Horton and Horton, 1971:41-45]。

家族は社会化 (socialization) 機能をもつ。生後数年間 (あるいはもっと長く) 子供は家族内で過ごすのが常である。子供が他からの影響に晒される前に、家族はパーソナリティの基礎を形成する役割を果たす。この社会化過程において、両親は子供の役割モデルとして機能する。ある両親は、家族の役割において、また社会生活の要請に際し非効果的であるとき、役割を提示できないことになる。そうすると、その子供は社会に適用する役割を体験できないし、効果的な人生を歩めない。

家族の別機能は、愛情、親密さ、世話する人のための感謝、従順という愛情の機能 (affectional function) である。また、保護機能 (protective function) は、脅威から生き残るための身体的、社会的、心理学的な隔離のための欲求を満たす。経済的機能 (economic function) は、労働の割り当て、所有、家族の生き残りに必要とする財の分配を提供する [牟田、1995年]。

現代社会における核家族の脆弱性が指摘される。それは家族意識の求心化の傾向である。大正期、日本において情緒的で私的な「家庭」的な家族の観念が普及した。都市の中間層がそれを現実化しはじめた。子供は親によってのみ保護され育成されるのが当然視される。子供は、いわば親には一種の「私有物」となって家族内に完全に閉じ込められる。それは親子の愛情を強化するが、子供は外部からの支援を完全に遮断するようになる [牟田、1995年：200頁]。

大正期に比べ都市化が飛躍的に進んだ昭和期では、下町では残るとはいえ、ますます地域・親族の共同体の意味は薄くなり、個々の核家族が外部から分離・独立して生活を営むようになった。もちろん、戦時中はそのような個人主義的な態度は否定されたとはいえ、例えば集団疎開、軍事工場への徴用など人為的な強制でのみ可能である。ただ、生活の糧は地域とは無関係に一家の大黒柱である夫が会社から得ることであり、また育児・家事全般は家族の親（通常、母親）が遂行する<sup>(3)</sup>。社会内も家族内も分業体制が次第に浸透する〔牟田、1995年：200-201頁〕。

本作品を家族社会学の知見に照らすとどうなるか。父は核家族の長として、娘と弟の愛情・保護・経済的機能をいくつも（母の役割も含めて）果たそうとしながら、ある意味では、その行為は新坊を家族内に「閉じ込めること」になった。結果的に、子の「私有物」化が父子の愛情を強固なものさせる。

もっとも、いくら家族の愛情や絆があっても、家族を取り巻く時代・社会・環境は変化する。そして家族内の個々人の立場も成長とともに異なっていく。そのことについては本作品の続編を必要とする。もちろんそのような事情を勘案したうえで、織田は本作品の末尾に次の文を残したのだろうか。

青春の回想の甘さは終わり、新しい現実が私に向き直って来たように思われた。風は木の梢にはげしく突っ掛っていた〔『木の都』〕。

それは回顧に浸るだけでなく、「新しい現実」は、父、姉、新坊にとって、もちろん「私」にとっても青春が終わり、来るべき時代、社会、世間の変化という現実、つまり「大人の厳しさ」を甘受しなければならなくなることを暗示する<sup>(4)</sup>。ということは、織田はある家族の、現在までの生活を描いただけでなく、今後の登場人物やその家族物語を念頭に置いたかもしれない。

## 5. 仮説2についての解釈：本作品は私小説ではないこと

1912年生まれ、織田作之助は、大阪市東部の生国魂神社近く上汐町筋路地裏日の丸横丁で中学卒業まで過ごした。戦前、路地には貧しい長屋が並び、表通りの人々から路地裏の子と蔑視された。彼が長姉タツ（夫妻）に学費・生活のうえで世話になる。次姉は小学校卒業を待たずに北新地の芸妓として家を出る。織田も小学校を卒業すると一時丁稚奉公に出された、と言う。高津中学校（現高校）に猛勉強し入学した。その後も、両親を早く亡くしたためもあり、長姉タツの嫁ぎ先に面倒をかけた。姉たちは織田の小説の中でよくモデルとして使われる。織田の成長期の体験はその後に影響する。

彼はその貧しい出自を終生自ら公言することはなかった。それだけ路地裏の子という劣等感は大きかった。その裏返しの感情として、例えば自分の祖先が織田信長に由来するなど吹聴していた。または晩年に阪急沿線の高級住宅地に居住する声楽家との再婚などがそうである。しかし、彼は町民文化の息づく大阪をこよなく愛し、大阪人を賛美するのみならず、人々の肌のふれあいを詳細に書いた〔三島、2013年b:62頁〕。

織田の主要作品には、上汐町の路地長屋が頻りに登場する。それは織田の言う「貧乏長屋」である。それが織田には大阪そのものであり、自らの故郷を再三、小説の舞台とし詳細に描写する。

上汐町筋は市街を南北に走る通りのひとつである。その一筋西が谷町筋、さらに西に松屋町筋。路地・横丁とはそのような通りに面した家々のわきに入る細道で、裏長屋が並ぶ庶民の居住地である。口繩坂は松屋町筋から谷町筋へ、西から東へと登る起伏の多い細い坂道である。「登り詰めたところは露地である。露地を突き抜けて、南へ折れると四天王寺、北へ折れると生国魂神社、神社と仏閣を結ぶこの往来」とあるから、本作品の舞台である。大

正時代の上汐町筋日の丸横丁付近は、西側に「風呂桶製造、あんま、松井の散髪屋、日の丸湯、この散髪屋と風呂屋の間が日の丸横丁の入口」、東側に「下駄屋、日の丸横丁の向いの地藏路地入口、薬局」と並んでおり、作品に描かれた町並も現実のそれと酷似する〔宮川、1999年：189-190頁〕。織田が詳細に描写すればするほど、私小説の形態を踏襲する印象を受ける。つまり、織田の少年・青年時代の回想である。京都の三高時代での吉田の洋食屋の主人を、この町のレコード屋にする舞台設定でさえ、織田には「二つの回想の町」を重ね合わせていっそうの私小説風の印象を感じさせる効果が出ている〔大谷、1973年：193頁〕。織田は述べる。

敢えて因縁をいうならば、たまたま名曲堂が私の故郷の町にあったということは、つまり私の第二の青春の町であった京都の吉田が第一の青春の町に移って来て重なり合ったことになるわけだと、この二重写しで写された遠いはずかしの青春にいま濡れる思いで、雨の口縄坂を降りて行った〔『木の都』〕。

青山はこの作品における私小説のあり方を「純粹に構成手法としての“私”小説」と指摘する〔青山、1970年〕。しかし、宮川は、「私」の物語としての形をとりながら、そこにもうひとつの物語、新坊の物語を巧妙に取り込み、新坊物語が作品の中心になる、と解釈する。言うまでもなく、作品中の新坊は虚構の人物である。なぜなら、大阪の下町の小学校を卒業し、苦労人の父親のもとで新聞配達をし、やがて名古屋に徴用として働きに出る新坊は、「私」の少年時代のありえた姿だからである。新坊が登場するあたりから、自らの少年時代の回想がなくなる。「二重写し」は、「第二の青春の町であった京都の吉田が第一の少年時代に重なり合う」ことで、「私」の想いというよりも、「私」の幼稚から青春への物語、それに「私」がそうになっていたかもしれない創作上の「新坊の物語」が、いわば私小説のような形をとった創作物語として展開する。一見「私小説」風でありながら、内容は全部架空の創造した小説、と織田が言いつくろ根拠は確かにある。

## 6. 仮説3についての解釈：「小説の思想」と「小説の中の思想」とを区別すること

思想とは、人間が自分自身および自分の周囲について、あるいは自分が感じ思考できるものごとについてあるまとまった思索様式である。単なる直観とは区別され、感じたこと（テーマ）をもとに考えめぐらし、自ら反芻することで、直観で得たものを精緻化して言語としてまとめることである。織田は特定の思想を信用せず、事実の関係を丹念に描くことが一番信用できる、とよく語った。本作品でも、大谷や宮川が指摘する事実関係が詳細に散りばめられる。だから、リアリズムはあっても思想はあるのだろうか。筆者は織田の思想があり、本作品にもそれが反映されている、と考えられる。そうであれば、織田の主張する思想とは何であるのか。

「小説の中にある思想」と「小説の思想」とは厳密に区別して考えなければならぬ。小説家が信じている、或いは疑っている。または闘っている唯一のことは「小説の思想」であって「小説の中にある思想」とは少なくとも小説家にとっては第二義的なことだ。さようなものは小説家でなくとも誰でも持ち得る思想であって、べつに小説家の専売特許ではないのだ。しかし、読者は往々にして「小説の中にある思想」のみを読み取ろうとし「小説の思想」には眼もくれない。読者だけではなく、小説家もしばしばそんな芸当を演ずる。演じて「思想の中にある思想」で浮足立ってみても、しかし小説を支えているものはただ「小説の思想」だけである。これはもう形式とか内容とかの問題をはなれて、いいかえればアプリアリのようなものである〔『小説の思想』〕。



『小説の中にある思想』で自分の作品の貧困を擬装する厚顔無恥は避けるべきである」「理屈っぽい読者や批評家や、小説の思想を信じ得ない小説家は、小説の中にある思想に帰納して、それでもってその小説を語りつくそうとしたと思いたがる」と『小説の思想』。

小説の修業とは、いろいろいい方もあるけれども、私は忍術の如きものだと思う。「私の思想」を「小説の思想」の中にかくしてしまう極意を掴むことだと思う〔『小説の思想』と「小説の中の思想」〕。

織田は特定の思想を嫌った。それは「小説の中の小説」である。織田は人々の日々の生活、その心情を丁寧を描くことで、小説全体から伝わる自らの考えを示す。それは単なる事実の羅列ではなく、それらをまとめる信条を「小説の思想」と定義する。その際、大阪の下町に生きる人々の営みは不可欠であった。

「私はこれまで下積みの生活の底を這いずりまわる貧乏たらしい人間を、好んで描いてきたのは、その人たちのどん底のなかでなお生きんとして黙々と営みつつける日々の営みの哀れさに、心惹かれたためであったが、なぜ、この信条で執拗に繰り返して書き続けてきたかということが、今はもうはっきりとした」「理論の殻の助けを借りずに、人間に迫りたかったからである」〔『可能性の文学』〕。

新坊落第しましたよと、主人は顔を見るなり言った。…主人はいや学問を諦めさせて、新聞配達にしましたとこともなげに言って、私を驚かせた。女の子は女学校ぐらい出て置かぬと嫁に行く時肩身が狭いこともあろうと思って、娘は女学校へやったが、しかし男の子は学問がなくても働くことさへ知ってをれば、立派に世間へ通るし人の役に立つ、だから不得手な学問は諦めさせて、働くことを覚えさせようと新聞配達にした。子供の頃から身体を責めて働く癖をつけとけば、きっとまじな人間になるだろうというのであった〔『木の都』〕。

私は好んで「ある人の生涯」を書くが、その生涯にあらわれた瞬間瞬間の真実をみせてくれるからに外ならない。大阪人のなかに真実の人間性が見られるからである。大阪に生まれ、大阪に育ち、今なお大阪に住んでいる私は、根っからの大阪人であるが、私は今後いよいよ以て大阪人でありたいと考えている。そうしてこの希望は即ち「大阪人が書ける大阪人」になりたいということに外ならない。「ジュリアン・ソレルが書けたスタンダー」のように。小説家の喜びとはまさにそれであると私は思うのだ〔『小説の思想』〕。

『東京文壇に与う』の中で、織田は、宮内寒弥の言葉を借りて、「東京と大阪の感情は、永遠に氷炭相容れざるものと思う。だから東京中心の文学感情が織田に反感を感じたことは、織田がそれだけに大阪的であって、逆に名誉である」とし、「われわれの国の固有の伝統と文明とは、東京より却って諸君の郷土に於いて発見される」と地方文学の振興を重視し、「私の文学修業は大阪勉強ということに外ならない。大阪は私の生まれた故郷であり、そして私の師である」〔『わが文学修業』〕と述べる〔三島、2013年b：62-63頁〕。

「小説の中の思想」だけで片づける世評、その浅薄さを見抜き、「小説の思想」なる概念を主張する。しかし、「小説の思想」において大切なのは小説全体から読者に迫るもの、小説全体から語りかけるもの、それが「小説の思想」である〔三島、2013年：64頁〕。

織田は個々の事実を関係づけ、それを大阪という風土・文化の中で人々の日々の営みを描くことで「真実の人間

性」の普遍性を「小説の中の思想」でなく、小説全体から読者に感じ取らせる「小説の思想」という思想に依拠しようとした。

### むすび：織田作之助は大阪の「小説の思想」家であること

本作品への筆者の疑問と仮説は織田文学の核心部分に触れる、と考える。織田の思想を読みとるにはヒントになる。最後に疑問と仮説から整理しておこう。

母親を物語に登場させないのは作品の展開に不要だったからだろうか。それともテーマを父子に絞り込んで、語り手の「私」が語れば済むからだろうか。否、母親を登場させないことで、いっそうの父娘弟の親子・姉弟の家族愛を強調できる。

読者は父親が新坊に母のような世話を焼く場面に幾度か遭遇する、と同時に父親の役割として息子の将来像を指導することを期待する。姉は母親役には（母親としての愛情という点では）まだ力量不足である。もちろん、織田は姉の存在を単なる添え役と扱わない。他の作品でも同様に、物語の筋道や伏線で大切な役割、余韻を残す人物を設けることがある。例えば、『世相』の最後の部分にだけ登場するマダムの妹役である。マダムと対比する役割を担わせた。本作品の姉は父子愛を強調する役割を演じる。

その時襖がひらいて、マダムの妹がすっとはいって来た。不器用にお茶を置くと。厭々と固い姿勢のまま出て行った。紫の銘仙を寒そうに着たその後姿が襖の向こうに消えた時、ふと私は、書くとすればその妹と……思いながら、焼跡を吹き渡って来て硝子窓に当たる白い風の昔を聴いていた [『世相』]。

娘さんの口調の中に、私は25の年齢を見た。25といえば稍婚期遅れの方だが、しかし清潔に澄んだ瞳には屈託のない若さがたたえられていて、京都で見たころまだ女学校へはいったばかりであったこのひとの面影も両の頬に残って失われていず、凜とした口調の中に通っている弟への愛情にも、素直な感傷がうかがわれた [『木の都』]。

本作品は私小説と言われるが、私小説風の形式を採用するが、私小説ではない。それなら、織田は登場人物の中に母親（=妻）を入れることができるはずである。しかしあえて母親を登場させない効果を意識したうえで、父子親子の関係が描かれたのであろう。母親不在がいっそうこの父子と姉弟の家族愛・絆をより強くする。もっとも、姉は新坊の姉であって母親代わりはできない。

大阪（の下町）へのこだわりはどう考えればよいのか。「小説の思想」は本作品ではどう描写されているのであろうか。織田は、『わが町』の主人公・他吉に、「人間は働くために生まれてきたのや」「人間は自ら身体を責めて働かな嘘や」「文句いはずにただもうせいだい働いたらえええのや」、と語らせる。ただただ、自分の現在を自覚するだけである。他吉、本作品の父、それに織田の人生観・世界観と不即不離の関係にあることが、登場人物の語る言葉だけでなく、小説全体から切々と訴えかける [杉山、2013年a：140頁参照]。ちなみに「働く」という言葉は、大阪（弁）では、「傍（はた：周囲の人々）を楽（らく）させる」のに自らが周りの人々のために苦勞することをいとわない意に通じる、と理解される。それは古くから大阪人に共有する人生観・世界観である。ここになぜ織田が大阪（の下町）にこだわり続けたかを理解できる。織田は吉村正一郎との対談の中で次のように述べる [織田・吉村、2013年a]。

自分が発見したことだけが、作家にとって思想というのだと思います。あの小説はモデルがあるのか、ないのか、これは君の経験したことかとかよくきかれます。僕は、リアリズムが文学の唯一の精神という考え方は認めない。人間の生活というものは、あんまり、リアリズム過ぎますね。リアリズムから逃れようとするところに、文学があるのじゃないか。日本の私小説というものは、生活の総決算だけを書いて、人間にはどういう可能性があるかということを書かないだね。

この発言はまさに『木の都』を「二重写し」で描く織田の「小説の思想」である。そして、その思想の中に、本作品の場合には、織田は、小説家としてのバックボーンとして、大阪に生まれ育ったこと、長屋住まいの路地育ちであること、そして作家・織田作之助の思想形成に影響した自らの出自が不可分に結びついている〔高橋、2013年b: 14頁〕。さらに、本作品は、小説において訴えるべき内容として、母親を不在にして父娘弟の関係の中で育む家族への愛情、それを抱きかかえ、そして大阪人の思考・志向を盛り込み、織田が信じる「小説の思想」を背景に描かれた「私小説風創作物語」である<sup>(5)</sup>。それゆえ、本論において述べた、さきの疑問と仮説にもとづく「織田作之助」論を述べるのは筆者だけであろうか。

## 注

- (1) 1944年7月に封切られた映画『還って来た男』（川島雄三監督初作品）は『木の都』と『清楚』をもとに織田自身がシナリオを執筆した。その中では、「名曲堂」の娘を矢野葉子として登場させる。『世相』の最後に現われるマダムの妹役と同様、登場場面はほとんどないが、織田が注目するタイプの女性である。
- (2) 木犀の花言葉は「忍耐・威厳」である。
- (3) 従来、母親の子供への愛着が子供の成長に影響すると考えられてきたが、その見解に異論が提示されている〔高橋、2013年第2章〕。本論では、従来の見解による視点（たぶん、織田もそうであろう）から説明する。
- (4) 高橋俊郎によれば、妻一枝が1944年1月に病に倒れ（同年8月死去）、織田は病床に付き添いながら『木の都』を執筆した〔高橋、2013年b〕。ボードレールの「旅への誘い」をデュパルクの作曲でパンゼラが歌っている古いレコードが本作品中に出てくる。パンゼラが朗々としたバリトンで耽美的に歌うこのレコードは、東京での織田の作家修業時代に行きつけの食堂であるペリカン・ランチルームで聴いた苦い青春の回想に繋がる〔大谷、1973年: 122-123頁〕。

瀬戸内晴美と前田愛は対談で、織田は小説の書き出しはうまいが、最後の締め括りがあまりうまくない、と指摘する。例えば『木の都』の最後の数行は、なくもながという感じがすると指摘し、最後の数行を削れなかったのは、織田が若かったからだと解釈する〔瀬戸内・前田、2013年a: 86頁〕。だが、文章上のムダを省くというより、本論で述べた論証を理解すれば、『木の都』の末尾文は必要である。また、戦後同作品を単行本に再録するときにも、この部分を削除していない。

- (5) もちろん、作家が読者に訴えたい信条・思想を伝える表現方法・手段は二次的なことにすぎない。読者は私小説か否かなどという文学上の形式にこだわらない。人間がどのように描かれるか、またそれが読者にどのように人生の意義を見出せるかを知りたいだけである。

## 参考文献

青野季吉「解説」織田作之助『夫婦善哉』新潮文庫、1950年

- 青山光二「木の都」作品解題、織田作之助全集5、1970年
- 青山光二『青春の賭け』中公文庫、1978年
- 大谷晃一『生き愛し書いた 織田作之助伝』講談社、1973年
- 織田昭子『わたしの織田作之助 ― その愛と死 』サンケイ新聞社、1972年
- オダサク倶楽部編『織田作之助 昭和を駆け抜けた伝説の文士“オダサク”』河出書房新社、2013年a
- オダサク倶楽部編『織田作之助 生誕100年記念』平凡社、2013年b
- 織田作之助・吉村正一郎 対談「可能性の文学」オダサク倶楽部編、2013年a
- 『織田作之助全集1～8』講談社、1970年
- 杉山平一「織田作之助について」オダサク倶楽部編、2013年a
- 瀬戸内晴美・前田愛「対談『夫婦善哉』と織田作之助」オダサク倶楽部編、2013年a
- 高橋恵子『絆の構造 依存と自立の心理学』講談社現代新書、2013年
- 高橋俊郎「ポータブル蓄音器が奏でた名曲」オダサク倶楽部編、2013年b
- 中石 孝『織田作之助 雨 蛍 金木犀』編集工房ノア、1998年
- 藤本義一『蛍の宿 わが織田作』中央公論社、1986年
- 藤本義一『蛍の宴 わが織田作2』中央公論社、1987年
- 藤本義一『蛍の街 わが織田作3』中央公論社、1988年
- P. B. Horton and R. L. Horton, *Introductory Sociology*, Learning Systems Company, 1971.
- 増田周子「木の都 [梗概]」浦西和彦編『織田作之助文藝事典』和泉書院、1992年
- 三島祐一「織田作之助の凄い言葉」オダサク倶楽部編、2013年a
- 牟田和恵「現代の家族」宮島 喬編『現代社会学』有斐閣、1995年
- 矢島道弘「織田作之助論 ―〈現実感覚〉を中心に―」無頼派文学研究会編著『無頼派の文学 研究と事典』教育出版センター、1974年
- 宮川 康『『木の都』作品解題』東郷克美・吉田司雄編『近代小説〈都市〉を読む』双文社出版、1999年
- 宮川 康「劇作家修業時代に出会った運命の女性」オダサク倶楽部編、2013年a